ジャンヌだけの「モディリアーニ神話」

（天国までも会いに行くわ…モディのもとへ）

モディリアーニの死の瞬間から「神話」が始まり、妻ジャンヌの死がその「神話」を揺るぎないものにしました。色々な逸話や伝説が創られ、彼の絵は何百倍にも高騰しました。しかし、ジャンヌにとってはモディとの思い出だけが彼女の「モディリアーニ神話」だったのです。

私はジャンヌ・エピュテルヌ。
正式の婚姻届は出していませんでしたが、画家アメデオ・モディリアーニ、…そうモディの妻でした。
1920 年 1 月 22 日、モディは病状が悪化して入院、同 24 日夜 8 時 50 分に息をひきとりました。そして同 26 日の未明、私は彼の後を追って実家のアパートの 6 階から身を投げました。モディリアーニ 35 歳、私は 21 歳。
すべてのモディリアーニ神話はこの時から始まったのです。
モディと私の全く関わり知らぬ世界で…。

1917 年の謝肉祭の日、私は朝からおめかしに余念がありませんでした。
太く巻いた長い栗色の髪を顔の両側に垂らし、自分で仕立てたカラフルなドレスに身を包み、長いスカート、長いブーツを履いて精一杯のおしゃれでした。
昨年の暮れに出会ったモディとの久しぶりの再会に胸をときめかせていたのです。
憂愁を帯びた彼の作品と彼の才能に憧れていたのでしょう。
じつは、…初めてモディに出会った時から、私は彼の虜になっていたのでした。
端正な顔立ち、その暗く翳のある眼には激しい輝きがありました。
そして、とつとつとしゃべる彼の口からは、時々みずみずしい詩句があふれたのです。
それと…周囲で頻繁に噂される彼の多彩な女性関係にも、私は興味を持ちました。
モディの方もまた、私の無邪気な振る舞いに謎めいた魅力を感じたのかもしれません。
仮装舞踏会のあと、コラロッシ研究所のデッサン室で、私は自分の描いた絵を彼に見せたのです。
「なかなか良いじゃない…」彼はそう一言言っただけでしたが、私の絵には興味を持ったようでした。
何度か会っているうちに、やがて、私たちは深く愛し合うようになりました。
しかし、私がモディと一緒になることを、家族の誰もが許しませんでした。
私が信頼してやまない兄のアンドレでさえそうでした。

14 歳も年上で、自分一人の生活も支えられない貧乏絵描き、そして大酒飲みの女たらしのくせに虚弱そうな身体、そしてなんと…ユダヤ人！
そんな男と一緒になることなど、とうてい家族の理解が得られる訳がありませんでした。
周囲からどんなに説得されても私は頑固でした。
絶対に自分の意志を曲げることはなかったのです。
私は堅実で面白みのない…そんなブルジョワ家庭から一刻も早く逃げ出したかったのでしょう。
父はすでにあきらめて傍観を装い、母とアンドレは最後まで私のことを心配し続けることになりました。

1917 年の 7 月、私とモディはモンパルナス界隈の安アパートで一緒に暮らし始めました。
モディの荒んだ生活がこれを機会に少しでも改善されるのでは…と、画商のズボロフスキーが借りてくれたのです。
ズボロフスキーは貧しいにも関わらず、モディの才能を信じ、色々な援助を惜しまなかった唯一の人間でした。
当初、アパートの部屋でそれぞれ絵を描いたり本を読んだりする日々もありましたが、やがて、そんな平穏な日々もすぐに終わりました。
彼はまた以前と同じように、毎晩、カフェに繰り出すのでした。
彼が強い酒をあおるように飲むことも、店で麻薬に手を出していることも知っていました。
が、私にはどうすることも出来なかったのです。
若い私の意見など聞くような人ではありませんでしたから…。
「酒は男一人で飲みに行くものだ」というのが、イタリア人としての彼の流儀でした。
ただ、夜の部屋に独り取り残されると、私は淋しくて不安でたまらず、よくロトンドの店まで彼を探しに行ったものです。
店の前で何時間も待っていることもありました。
酔っぱらって出てきた彼は「何でわざわざ店までやって来たのだ」と怒って私を蹴っ飛ばしました。
そしてしばらく経ってから「悪かったなぁ」と抱きしめてくれるのでした。

やがて私は妊娠し、母とモディと三人で静養のため南フランスに移りました。
ここもズボロフスキーの世話してくれた部屋でした。
私は女の子を出産し、名前は私と同じジャンヌと命名されました。
子どもが生まれたというのに、私はまだ若くどこか浮世離れした空間を生きているような女だったのでしょう。
どう子育てをして良いのか、分からなかったのです。
結局、母の手助けを借りることになりました。
しかし、母とモディの口げんかはすさまじく、私は二人の間でいつもおろおろするばかりでした。
モディには生まれたばかりの娘がとても愛おしいもののようでした。
娘と私の母子像を何度となく描いてくれたりしたのです。

モディはいつもたくさんのモデルを必要としていました。
そして私はモディの絶好のモデルでした。
ただ、私はモデルとしては特別な存在だったようです。
鉛筆で私のヌードをデッサンすることは２～３回ありましたが、油絵で裸の私を描くことはなかったように思います。
彼にとって、裸のモデルたちはやはりエロチックな対象でしかなかったはずです。
だから、アトリエで裸のモデルと対している彼を想像することは、私をとても嫉妬深くしたようでした。
特に、私が二度目の妊娠をしてからは、この感情はさらに強くなった気がします。
私は部屋の片隅からおびえた目で、モディとモデルたちを見つめました。
ズボロスキーの友人ルニアや学生のポレットをモデルにした時などは、私はモディとの仲を激しく疑いました。
なぜなら、モデルたちのモディに対する視線が恋する女の視線だったからです。
モディは酔っぱらって夜半に帰ってきて、そのままベッドに倒れ込み寝入ってしまうことがよくありました。
そんな時の彼の横顔をいつまでもじっとながめているのが、私の最高の幸せでした。
彼を独占しているという悦びを実感できたからでしょうか。
私はこっそりと彼の寝姿をスケッチしたものでした。

彼はすでに死を覚悟していたのでしょうか。
1919 年になると、前にも増して一晩中飲み続けることが多くなりました。
私が迎えに行くと、凍えきった通りの向こうから、コートも着ないままの男の影だけがふらふらとさ迷い歩いて来るのでした。
私がコートを掛けても払いのける…その身体は熱で汗ばんでいました。

やがてモディの健康状態はますます悪化していったようでした。
死の十日前、彼は腎臓の激しい痛みで床に就いてしまい、私がつきっきりの世話をすることになりました。
しかし、咳き込んでは血を吐くという日々が続くと、もう私も疲れ切ってしまい、あきらめにも似た気持ちになっていったようです。
私もモディの傍でただうつらうつら座っているだけになってしまいました。
周りには酒の瓶や、イワシの油漬け缶の空き缶があちこち散乱したままでした。
部屋の中は凍てつくような寒さだったと記憶しています。
夕刻にオルティスとキスリングが入って来たようでした。
彼らは大声で何か叫んでいました。
やがて医者がやって来ました。

モディは一階まで下ろされ、救急車で病院に運ばれていきました。
そしてそのまま病院で、意識が回復しないまま亡くなったのです。

翌日の日曜日、私は病院でモディの遺体と対面しました。
私は真っ白な彼の顔をいつまでも見続けましたが、頭の中は空虚なままでした。
何か言葉を出そうにも声も出ないのです。
そのまま後ずさりすると、よろめいたようでした。
私はその夜、実家の女中部屋に閉じ込められました。
この時になってようやく、モディがもうこの世にいなくなったことを実感したのです。彼のいないこれからの日々を思うだけで、目の前が真っ暗になりました。
独りぼっちの生活なんて、もう私には考えられなかったのです。
怖いから今夜は傍にいてほしいとアンドレに頼みました。
ベッドの枕の下にはナイフを忍ばせていましたが、お腹の９か月の赤子のことを考えると、なかなか決断が出来ないのでした。
夜が明けるような時間になっても外は真っ暗でした。
隣りでアンドレがうとうと眠りかけているのが見えました。
私は覚悟しました。
窓の方に向かってよろよろ歩きました。
そして、出来る限りの勇気を振り絞って、四角い窓枠の黒い空間の中に身を飛び込ませたのです。
私の身体は暗闇の宙の中をゆっくりゆっくりと舞い落ちて行きました。

モディと私の死後、前年から評価の高まりつつあった彼の作品が高騰し始めたようでした。
画商と批評家たちが結託してこの悲劇的な画家を宣伝し、彼の絵の値段をどんどんつり上げていったからです。
モディの葬式の時にさえ、二人の画商がやって来て彼の作品の取引を持ちかけていたと聞きます。
別の画商はその日、パリの中を走り回ってモディの絵を買いあさっていたそうです。
悲しみに打ちひしがれていたズボロフスキーの所さえ、容赦なく画商たちがやってきました。
描きかけの彼の絵を贋作専門家に仕上げさせ、サインを偽造して売りさばく人たちもいました。
彼の使い古しのパレットを売る人間まで現れたとの話もありました。
じっさい、彼の 150 フランの絵が死後 10 年で 50 万フランまでに高騰したのです。…市場には「モディリアーニ相場」なるものが出現していたのでした。

数多くの証言者が現われ、数多くの面白おかしい逸話が語られはじめました。
モディについての芸術評論が書かれ、モディの波乱に満ちた人生が書かれ、モディを題材にロマンティックな小説まで書かれ、そしてそれは映画にもなりました。

逸話は決まって「ある晩、彼はすっかり酔っぱらっていた…」から始まるのでした。
酒代として置いていったデッサンの山がやがてトイレットペーパーに変わった…とか
血を吐きながらワインをラッパ飲みしてカンバスに向かっていた…とか
市街電車の線路をふらついた後はゴミ箱で一夜を明かした…とか

また、モディが死ぬ間際に叫んだという言葉も色々なものが出てきました。
「ぼくにはあとわずかの脳しか残っていない」
「心配することはない。ぼくはスーティンの中に天才を残していくから…」
「妻が墓までついて来てくれれば、ぼくは天国で最愛のモデルを手に入れられる…」
そして最期には
「懐かしいイタリア！」と叫んだというものでした。
こんな逸話を聞いたらモディは何と言うのでしょうか。

こうして、歪められ誇張され続けた「モディリアーニ神話」は、世界中を駆け巡っていきました。
後の世になって「エコール・ド・パリ」を代表する画家と、訳の分からない位置づけをされましたが、モディはいつもアートの時流とは関係ない次元で描いていました。
彼なりに苦闘しながら、彼独自の芸術を模索し続けたのでした。
彫刻家を自任することもあったくらい、石彫にこだわった時期もありました。
やがてヌードの絵にこだわりました。
彼の生前の唯一の個展は、ヌード作品が中心でした。
しかし、警察官がやって来ると、その日のうちに絵が撤去されて、その個展は終わりました。
彼は世間に妥協しなかったし、金銭にあこがれるふうでもありませんでした。
私はそんなモディの才能を信じたし、精一杯に愛しました。
しかし、生前、彼の絵はなかなか売れず、いつも極端に貧乏のままでした。
でも、彼と一緒にいる時、私は本当にどんな貧乏も苦にはならなかったのです。
彼と過ごした日々こそ何よりかけがえのないものでしたから…。
そう…彼との思い出だけが、私にとっての「モディリアーニ神話」なのかも知れませんね。
ところで、最後にこれだけは私に言わせてほしいのです。
モディは私の絵を良いねと言ってくれた、ただ一人の理解者だったのですよ…。